

Home Concert 2005)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

## マーキングのポイント(1)

前号で次の4つのマーカーについて述べました。

- 1, Wait for Soloist Mark (ソロの演奏を待つ)
- 2, Wait for Special Signal (特別な信号を待つ)
- 3, Restore Tempo mark (テンポを楽譜通りに戻す)
- 4, Ignore Soloist Range (ソロ演奏を無視する)

H Cの最大の特徴であるこのマーキングは演奏者が自由に付けることが出来ます。最初にH CがS M Fを読み込んだ時にする作業は曲全体の小節数を数えることです。その次にH Cはそれぞれの小節の頭の音符を記録します。勿論曲全部の音符データは記憶していますがその中でも小節の頭とか拍子が変わる場所とか、テンポが変更される場所は自動的にマーキングされます。それ以外のマーキングは演奏者の演奏解釈によって个性的に設定します。

## 1, Wait for Soloist Mark のポイント

ソロの演奏を待つという機能を持つマークです。これは様々な場面で用いられますが、最も一般的な付け方は、オーケストラ等の伴奏がお休みで、ソロだけが演奏しているような場合に、ソロが終わらない内に勝手に伴奏が飛び出すのを防止するのに使います。つまり、「**休んでいる伴奏に演奏の開始を促す合図としてのマーキング**」です。モーツァルトのピアノ協奏曲の第2楽章等ではしばしば最初はピアノソロで始まり、途中からオーケストラが伴奏を始める事がよくあります。従来のMMOレコードではバックでメトロノームを鳴らし、ソロがそれに合わせて演奏することでこの空白の小節の同期をはかっていました。MIDIによる現行市販のアンサンブルシステムでも同様にLEDの点滅やメトロノーム音でこの問題を解決しようとしていますが、H Cではメトロノームに縛られず自由にソロを演奏できます。オーケストラ(伴奏パート)がシンクロするべきソロパートの音にマークをつけておくとその音が来るまで伴奏は開始されません。さらにH Cの優れているのはその一見伴奏が休んでいるように見える瞬間にでも、ソロパートのテンポを掴みそのテンポを伴奏パートに伝えるということです。

これは実際に指揮者がやる作業と全く同じです。指揮者はソロイストの演奏に耳を傾けテンポを掴み、オーケストラが出るべき場所で合図を送るその音符の場所を赤鉛筆でマークするというのと同じ考え方です。

もう一つの付け方は、フレーズ最後の音に付ける方法です。音楽的な演奏というのはアゴーギク(ギリシャ語を語源とする速度変化による表情のこと)を伴うのが普通で、特に

フレーズの最後の2つの音の間のテンポ変化はrit.の効果などでは重要です。「いらっしやいませ」という店員の言葉は最後の「ま・せ」という二文字のテンポアレンジで優雅にもなれば軽薄にもなります。同様に音楽のフレーズでも最後の「せ」に当たる音符がその前の音からどれぐらいのテンポ変化でやって来るかが重要な表現なのです。そこで、この目的に沿ったマーキングは「**フレーズの最後の音にマーキングをする**」という原則です。このマークを付けることで、フレーズの最後をどんなテンポで弾いても次のフレーズが飛び出して来ることはありません。

三つ目のマーキングはその逆でフレーズの開始位置にマークします。これはそのフレーズの始まる直前の音がフェルマータなどで不規則に延ばされる場合、じっと耳をすましてフレーズの開始音を待っている指揮者のような働きをします。つまり、「**フェルマータの後の音にマークする**」ことで、フレーズの頭は確実にシンクロすることが出来ます。



マークをする時はスコアモード又はピアノロール画面で、マークしたい音符(音符はだめ)の上でマウスを右クリック(Macではcontrolキーとクリック)します。そうすると上の画面のように実際の音符に赤い●がつけられます。

同じ場所で同じ操作をするとこのマークを消すことができます。あまりマークを付けすぎると演奏が「**各駅停車のような状態**」になってしまいますのでアーティキュレーションに支障のないよう注意が必要です。

## 特殊な曲の場合

同じ形の音型が連続しているような曲はH Cでも人間でも苦手です。つまり「**どこを演奏しているのかわからない**」からです。このような曲ではまれにH Cは演奏がずれることがあります。特に演奏が正確で無い場合にそのような混乱を起こします。このような場合はIgnore Soloist Range(ソロ演奏を無視する)と併用して、怪しいところは無視させて、確実に弾ける所にマークをするとうまくゆきます。